

なれなかった。「こんだけやってだめならだめ」。すっきりと一区切りつけた。

選手時代から気になっていたのは、レノファのクラブとしての未熟さだ。資金不足なのにスポンサーを集める営業の人材が

いなかった。山口国体も終わり、今年は頼りの強化費もなくなる。正念場で「営業やらないか」と声がかかった。「クラブを変えたい」。もう一度、サッカーに懸けることにした。

練習や試合も手伝う。紅白戦

に出た後、スーツに着替えることも珍しくない。これまで休みは1日だけ。それでも、つらいとは思わない。「ただ、試合に出られないのがきつい」。サッカーが好きなんだと、改めて感じていた。(高田正幸)

柳井にこだわり 文具新商品続々

文具店経営
やすゆき
きさか
木阪 泰之さん(49)
=柳井市



創業100年を越す文具店、木阪實文堂の4代目。金魚ちょうちんをデザインしたノートなど、柳井にこだわった商品を次々と生み出している。「大手と競争しても勝てない。ヨイドン、で逆を行かない」と

大学を出て生命保険会社に就職。関東に赴任した。4年目、「戻って来る気がないな

ら廃業する。どうするか」と父から手紙が来る。「帰らなぐちやいけないのかな」。半年後に退社。大阪の文具店などで9カ月間修業して、28歳で柳井に戻った。

最初は、県外に販路を伸ばすのがカッコイイと思っていた。ノートや鉛筆より単価の高い事務機器を売ろうともがいたりもした。でも激しい競

争にさらされる。4代前半のある日、小さな店なのに大手と同じやり方をしてもダメだ、と気づいた。「半径100円を対象にした文具屋で生きていこう」

改めて柳井を見つめた。白壁の町並み、金魚ちょうちん……。「なかなかいい町ではないか、と」。撮った写真をカラーコピーしてはがきにした。磁石やバッジなどの金魚ちょうちんグッズも売り出した。安くはなくても好きな人が買いに来た。地域話題を載せたニュースレターを毎月発行した。売り上げも利益も上向いた。

白壁の町並みにある支店は創業の地で、太い梁や戦前の看板が残る。文具資料館にして、文具好きの人が集うスペースにしたい。金魚ちょうちんグッズも年に三回は開発したい。「柳井をPRすることで、柳井に暮らす人が一人でも増えれば」(渡辺純子)